



Japan Optometric Association News

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会会報

編集発行 「認定眼鏡士®」を認定・教育する唯一の公益社団法人
公益社団法人 日本眼鏡技術者協会
発行人 津田節哉 編集人 辻 戦三

〒 532-0003 大阪府大阪市淀川区宮原1-2-6 新大阪橋本ビル9F
TEL 06-4807-5070 FAX 06-4807-5009 <http://www.megane-joa.or.jp>
E-Mail joa@maple.ocn.ne.jp



CONTENTS

- 巻頭言
「これからの眼鏡教育」 木方伸一郎教育部長 2
- トピックス
片山敬三理事が褒章受章 4
日本眼鏡学会新理事長に魚里 博氏 4
日本眼鏡学会年次セミナー
「視覚のコンシェルジュ」 5
日本眼鏡学会オープンセミナー
「超高齢化時代の眼鏡矯正（白内障術後眼鏡の最適化）」 6
- ブロック会議
東北・近畿・九州 7
- 誌上眼鏡学 連載5
「レンズの設計で遊んでみましょう」 内田 豪専任講師 8
- 国際部
第2回 WCO・第21回 APOC 報告 国際部 関真司 10
- 議事報告
理事会(平成29年5月10日)
総会議案・会員減による財政逼迫 12
通常総会(平成29年6月19日)
事業計画など原案で承認 14
カメラアイ 17
理事会(平成29年10月25日)
認定資格制定委員長に魚里 博先生就任 18
- 支部活動報告 20
- 消費者の眼鏡相談 24
- 眼鏡技術者・認定資格制定委員会、
組織活性化特別委員会、編集後記 25





これからの眼鏡教育

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会 副会長
教育部長 木方伸一郎

AIの進歩は著しく、現在の職業の中でも数年のうちには、AIに任せられることになると予想される職業も多くあります。AIの得意とする仕事は、決められたタスクを速く、しかも正確に、そして疲れないでこなす仕事です。これには、人間の能力と比べものにならない程の優れた能力があり、AIに任せられることになるでしょう。

また、最近は大規模データといわれる膨大なデータから分析をすること、また過去の経験をもとに傾向を学習し、より効果の高い戦術を編み出すことで、将棋やチェスに应用され人間を凌駕するようになってきました。単純なタスクの仕事だけでなく、複雑であっても多くの経験値で解決していく仕事もAIの仕事になる可能性があります。このような世の中の大きな流れは、簡単に変えられるものではありません。私たちは、この流れを意識しながら、自分たちの眼鏡技術者としての仕事の質の向上につなげていく必要があります。

私たち眼鏡技術者の仕事の中でも器械の方が、よりまちがいをなく迅速にできる業務があります。それを利用して、オートレフでプリントアウトされた度数そのままに調製し、クレームがあれば、問題を解決するよりも、返金するシステムをとることにより、人的効率を高める眼鏡販売のやり方もあるようなことを耳にします。そのやり方に対し、ある一定の割合の人々は、その方が安くて速くて良いと思うかもしれませんが、しかし、自分の悩みや問題を親身に聞いてくれて、いっしょに解決に向かって努力する眼鏡の調製方法を求める人々も少なくないと思います。この人々のためには、器械に任せるところは任せ、そのデータを活用しながら、その人にあった解決方法を見出して、その人にあった説明方法で説明し、その人々に接していくことがより大切になってくると思います。私たち認定眼鏡士は、このような信頼される技術者を目指しています。一時、時代は「アナログからデジタルへ」という言葉に代表されるよう

に、すべてのものがデジタルデータの高速処理で解決する時代になるかのようにいわれたことがあります。しかし、最後の大切な部分は、やはり人間に人間として接することが、人間の世界では欠かせないことが多くあると思います。「アナログからデジタルへ」いったような一方的な流れではなく、「デジタルを生かしてアナログへ」といったような流れこそが今求められていると思います。

眼鏡技術者の仕事もまさにこの部分でさらに必要とされてくるのではないかと思います。

本協会の生涯教育では、日進月歩の最新器械や最新技術に対する知識をできるだけ早く、またわかりやすく、将来の展望も含めて、情報提供していきたいと思っています。最近の眼科の診断機器はAIと画像処理技術の発達により、大きく変貌しています。眼科では、なかなかゆっくりと時間がとれずに、しっかりと説明が理解できなかったお客様に、医者としてではなく、身

近な視力に関する仕事をしている技術者として、眼科治療の妨げにならないでサポートしていくようにするための知識を会得することは大切だと思います。

また、スマホやLEDに代表されるように日常生活での視環境も10年前では想像もつかないような社会の中で、現在私たちは生活しています。そんな視環境の中で上手な眼やメガネの使い方についても、お客様にどうアドバイスし、何を提案していったらいいかを学べる場に生涯教育をしていきたいと思っています。

昔は、メガネは仕方がないから掛ける道具ととらえられることが多かったかもしれませんが、最近は、個性をより高めるためや、年齢を重ねても生き生きと人生を楽しんでいるように見えるためのツールとしてメガネを掛けようとする人が多くなっているような気がします。そのデザインや掛け方が光学的に見て妥当なのかどうか、また妥当とするためには、どのような問題の解消法があるかなど、実際の眼鏡調製にすぐ役立つような情報提供もできるように努めていきます。

今まで学習してきたことを、繰り返し学んで自分のものと必要としていく勉強の機会も提供していきたいと思っています。同じことでも、違う観点からアプローチして学ぶことにより、より理解を深めることができるのではないかと思います。

また、知識だけでは、実践にうまく生かすことはできません。例えば、両眼視について21項目を通してどれだけ正確に分析したとしても、それだけでは眼鏡提案の答えとはなりません。そのお客様の悩みや問題を、できるだけ具体的に多方面から把握するとともに、眼鏡に対してどのようなことを要望し、期待しているかを読み取ることが必要だと思います。その上で日常生活での眼の使い方を具体的に把握して、的確な眼鏡提案をするのが信頼される眼鏡技術者の役割ではないかと思います。分析とニーズ

のバランスにより総合的に判断して満足度の高いメガネを提案することが期待されていると思います。さらには、ご納得いただけるように、そのお客様の年齢や性格や理解度に合わせた説明ができるスキルについても勉強していきたいと思っています。

そして、もうひとつ大切なことは、「学びの継続」です。常に興味を持ち続け、今まで学んだことを反復して復習するとともに、新しい刺激にチャレンジしていく気持ちが大切です。本協会としては、その刺激のひとつとなることを期待して、SSS級の認定眼鏡士の試験を実施してきました。勉強が簡単には継続できない環境のなかでチャレンジした方々のご苦勞に接し、ほんとうによく頑張られたと敬意の念をいただきます。しかし、チャレンジされる方の人数は少なく、さらに年々減少傾向にあり、協会がかかる諸コストのわりには、その目的の成果があがっていないのが実情です。その現状を直視し、成果のあがらない原因を探り、新しい刺激の方法を模索していくことが必要だと感じています。同時に、この自主認定制度自体が国家資格という新しいステップに向けて動きがみえてきています。国家資格の動向が明らかになってくるまで、SSS級試験の実施は、一度立ち止まって、新たな「学びの刺激」を皆さんのご意見をきき考えていきたいと思っています。

最近「人生は100年時代」と言われています。この眼鏡技術者という仕事は、いくつになっても気持ちさえ維持すれば楽しくできる仕事だと思います。全く同じケースはなく、100%の正解のない奥の深い仕事です。自分で自分を励まして学び続けましょう。

春の叙勲

片山敬三前副会長 旭日双光章を受章



平成 29 年春の叙勲で片山敬三前副会長（会員組織部長）が「旭日双光章」（経済産業省推薦）を受章されました。伝達式は 5 月 11 日、ザ・プリンススパークタワー東京で行われ、片山氏は夫人とともに出席されたあと、皇居「豊明殿」で天皇陛下拝謁の栄に浴しました。片山氏は「まさか受章できると思わなかった。心からうれしい。これからも業界発展のために尽くしたい」と喜びを表しました。

片山氏は、昭和 16 年 4 月 4 日生まれ。本協会では、平成 10 年から理事、平成 18 年から同 27 年まで副会長兼会員組織部長、平成 18 年から同 28 年まで東京ブロック長兼東京都支部長。関連団体としては昭和 62 年に東京眼鏡商業組合の理事、平成 19 年に理事長に就任。また日本眼鏡販売店連合会の現副会長。

これからの組合事業および団体事業での活動を通じて、後継者問題を抱える中小眼鏡専門店の活性化や国民のビジョンケア推進に向けた眼鏡技術者のレベルアップに力を注ぐとともに次世代リーダーの育成指導に尽力したことが表彰理由となりました。

平成 9 年に東京都中小企業団体中央会会長表彰、26 年には東京都功労者表彰（産業振興功労）を受章しています。

日本眼鏡学会新理事長に魚里 博氏

日本眼鏡学会は 5 月 31 日、ウインクあいちで臨時理事会および第 21 回定時総会を開催、魚里博副理事長を新理事長に選任しました。

【新理事長プロフィール】（2017 年 5 月 31 日現在）

魚里 博（うおざと ひろし）昭和 23 年生（69 歳）

1978 年 大阪府立大学大学院博士課程修了、奈良県立医科大学助手（眼科学）

1985 年 日本学術振興会・米国 NEI/NIH の日米交換派遣事業にて
Johns Hopkins 大学 Wilmer 眼科へ留学（兼任）

1985 年 奈良県立医科大学専任講師（眼科学）、外科系大学院博士課程担当

1988 年 奈良県立医科大学附属病院医療情報室副室長（兼任）

2000 年 北里大学医療衛生学部教授（視覚機能療法学専攻）、北里大学大学院医療系研究科教授（視覚情報科学・眼科学）、同大学院感覚運動統御医科学群群長

2014 年 北里大学定年退任、新潟医療福祉大学医療技術学部教授（視機能科学科）

2015 年 大阪人間科学大学 医療福祉学科教授・専攻主任（視能訓練専攻）

2017 年 同上 学科長を兼務

現在に至る

2017 年 5 月 31 日 日本眼鏡学会 理事長に就任



「視覚のコンシェルジュ」で講演

本協会愛知県支部・キクチ眼鏡専門学校と共催

日本眼鏡学会（畑田豊彦理事長）は本協会愛知県支部およびキクチ眼鏡専門学校との共催で、第21回年次セミナーを5月31日、名古屋市のウインクあいちで開催、会員、メーカー、眼鏡学校生、本協会の会員ら約170人が熱心に聴講した。メインテーマは「視覚のコンシェルジュを目指して～生活者のためのビジョンケア～」。大会長は同校の伊藤克也校長（日本眼鏡学会理事）。

なお、臨時理事会・定時総会では、新理事長に魚里博副理事長を選任、就任した。（4ページにプロフィール）

プログラムは2部構成で、「視覚のコンシェルジュを目指して～生活者のためのビジョンケア～」をメインテーマに、2題の特別講演、一般口演12題のほか、会員メーカーおよび日医光眼鏡部会による学術的な内容を中心にしたポスター展示が会場隣室に設けられ、眼鏡技術者に役立つ情報を発信した。昼はセイコーアイウェア（株）、東海光学（株）の協力で学会としては3度目のランチョンセミナーを開催した。

開会にあたり大会長の伊藤氏は「視覚は人の行動を決め、人格を形成するのに影響を与える大事な器官。視覚に関して眼鏡の装用者だけにとどまらず、周囲の方に役に立つような知識を吸収してもらいたく、今回のメインテーマを掲げた。今日はしっかりと勉強を」と述べた。

第1部の研究発表は、座長に同校の加藤元嗣教授、長戸栄卓東京眼鏡専門学校主任講師を迎え、「タブレットを使用した赤緑十字視標の試作と近見眼位の測定」、「超ハイカーブ単焦点眼鏡レンズの光学特性」などを演題に、専門学校の学生、業界関係者らによる研究成果が発表された。ポスター展示は伊藤光学工業（株）、東海光学（株）、（株）ニコン・エシロールの会員メーカーおよび日医光から計6題発表され、質疑に応じた。

第2部は、加藤教授を座長に「Behavioral Optometry の概念」をテーマに米国オプトメトリストの内藤貴雄氏が特別講演を行なった。内藤氏は眼科学にも、眼鏡学にも、視覚学にも存在



セミナー会場

しない、オプトメトリーの Behavioral（行動）Optometry の概念を説明。「目は外部視力だけではなく体の内部ともつながっている。Behavioral Optometry としての知識と視点を持つことはわが国のビジョンケアにとっても大切な意味を持つ。同時に、メガネを作る上で重要な指針を提供してくれるものではないかと考える」と呼びかけた。

続いて、神奈川大学の和氣典二氏（日本眼鏡学会副理事長）を座長に迎え、「色覚の基礎知識と色覚検査の現状」のタイトルで安間眼科の安間哲史院長（愛知県眼科医会名誉会長・医学博士）による特別講演が行なわれた。安間氏は色覚検査の現状について「色の知覚には個人差があり、男性の20人に1人、女性の500人に1人は色覚の特性が他の人たちとは異なっている。平成28年4月からは色覚検査を希望する児童生徒は学校で色覚検査を受けることができるようになった」とし、「色覚特性には大きな個人差があることを理解し、誰もが色間違いをしにくく、心地よいと感じられるカラーユニバーサルデザイン化の推進が社会に望まれている」と提言した。

最後に、来年の年次セミナーの大会長を務める辻一央理事（日本眼鏡技術専門学校校長）から「次回の年次セミナーは大阪・天満橋の OMM（大阪マーチャндаイズ・マート）で来年5月15日に開催する。メインテーマは『眼鏡技術と最新眼鏡機器の融合』。多数の参加をお願いしたい」とアピールがあり閉会した。

「超高齢化時代の眼鏡矯正(白内障術後眼鏡の最適化)」で講演

日本眼鏡学会（魚里博理事長）は第21回オープンセミナーを10月12日午後1時30分から、IOFT2017会場近隣のTFTビル東館906で開催した。セミナーには会員、メーカー、小売店の関係者ら約160人が参加、「超高齢化時代の眼鏡矯正（白内障術後の最適化）」をメインテーマにした講演を熱心に聴講した。



セミナー会場

今回のオープンセミナーは同会の視覚機能・測定研究部会が主宰した。冒頭、セミナー大会長の魚里理事長（同部会部会長）が開会あいさつ、「快適な視機能や視環境を提供するためには、医学・医療、科学工業分野の進歩だけにとどまらず、眼鏡士を含めたアイケアプロフェSSIONナルの人々の連携・情報交換がますます重要となる。白内障に代表される手術は年間150～180万件にも及ぶようになった。今後、メガネの需要はますます増えてくる。今回のセミナーは『超高齢化時代の眼鏡矯正』をメインテーマにしたが、情報収集をしていただき、アイケアプロフェSSIONナルとして国民の保健衛生を向上させるためにもこのセミナーを活かしてもらいたい」と述べた。

はじめに「白内障屈折矯正手術と眼内レンズについて」のタイトルで、(医)コスモス会フジモト眼科総院長の藤本可芳子氏が講演。白内障手術・レンズの種類、乱視矯正手術、多焦点眼内レンズ、レーシックタッチアップ手術の概要を紹介した。

次に「白内障術後の眼鏡矯正 —デジタルデバイス社会を生き抜くために—」をテーマに、梶田眼科院長の梶田雅義氏が登壇。梶田氏はデジタルデバイスによる調節異常、スマホ老眼、老人の調節異常、人工眼内レンズ挿入眼の調節異常について詳説。「遠くから近くまで、どの距離にも瞬時にピントが合わせられることが必然の社会環境では、単焦点レンズの処方ではピント合わせの調節に負担をかけて、眼精疲労を発症させる。極力歪みを感じにくい最新デザインの累進屈折力レンズを提供する技術と環境が必要である」と話し、累進屈折力レンズの活用を推

奨した。

休憩をはさんで「白内障術後の眼鏡処方検査」の演題で梶田眼科の有賀義之氏が講演。「白内障術後の眼鏡処方は、眼鏡店と眼科が相互に協力し、患者に快適な矯正を早期に提供できる状態が望ましい」とした。次に朝倉メガネ ロービジョン・ケア推進室の金澤正継氏が「超高齢化時代の眼鏡矯正」のタイトルでスピーチ。金澤氏は「眼科領域では多焦点眼内レンズの矯正精度を高め、眼鏡を使用しなくても生活できることを目指す傾向にある。超高齢化時代を見据えた場合、個別のニーズに合わせた眼鏡もしくは補助具の選定を行なう必要が生じ、この要望に応えられる眼鏡店が求められている」と指摘した。

このあと、伊藤光学工業(株)、セイコーアイウェア(株)、東海光学(株)、(株)ニコン・エシロール、H O Y A (株)ビジョンケア部門の各担当者から最新情報の提供があった。同会レンズ研究部会長の高橋文男氏は「各メーカーから、新しいコンセプト・設計の製品紹介があったが、新しいレンズの開発に向けて、眼鏡店や利用者からのアイデアをメーカーに伝えていくことが重要になる。困ったことや要望はメーカーにお伝え頂きたい」と総括した。

最後に、次回の日本眼鏡学会年次セミナーで大会長を務める辻一央理事が登壇し、「来年は5月15日に日本眼鏡技術専門学校主宰で開催する。場所は大阪・天満橋のOMMホール。メインテーマは『眼鏡技術と最新眼鏡機器の融合』。期待してほしい」と述べ、セミナーを締めくくった

東 北

7月11日に東北ブロック会議が仙台市のホテルメトロポリタンで昼食会の後、相澤博彦ブロック長以下支部の関係者、本部からは塚田博事務局長の合計10名の出席で開催された。

議事としては、①東北ブロック長の改選（相澤博彦氏が退任し、互選の結果、羽田和弘氏がブロック長に）、②眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の動向（推進機構副代表幹事代行の相澤博彦氏より詳細に報告）、③今後のブロック会議の開催について（今後は支部長改選期に合わせて隔年開催とする）、④本部事務局から当年度の緊縮予算について、⑤平成29年度教育事業について教育特集号に基づき確認を行った。

（写真は東北ブロック会議）



近 畿

9月13日に近畿ブロック会議が京都市の飲食店「さつき」で、鈴木利夫ブロック長以下各支部の代表者、本部からは亀井正美副会長以下2名、合計20名の出席で開催された。

議事としては、各支部の活動報告のほか支部活動における日眼連と本協会の棲み分けについて、また本部事務局からは今年度の緊縮予算の説明と協力要請があった。さらに、日本眼鏡技術専門学校からは来年5月15日に大阪で開催される日本眼鏡学会年次セミナー及び総会への協力要請があった。ブロック会議に引き続いて近畿眼鏡協議会の定例会が開催され、終了後は別室で懇親会が開かれ、種々の意見交換をする中で親睦を深めた。

（写真は近畿ブロック会議）



九 州

10月11日に九州ブロック会議が佐世保市のワシントンホテルで、野口毅ブロック長以下各支部の代表者、本部からは津田節哉会長以下2名の合計14名の出席で開催された。

議事としては、①九州ブロック長の改選（野口毅氏が退任し、互選の結果仲西隆義氏がブロック長に）、②眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の動向、③今後のブロック会議の開催について（今後は本部からの補助金を半額にして毎年開催していくこととする。次年度開催は福岡県）、④本部事務局から当年度の緊縮予算についてなどの討議・報告があった。

ブロック会議終了後は懇親会が開かれ、種々の意見交換をする中で親睦を深めた。

（写真は九州ブロック会議）





著作者プロフィール

めがね技術コンサルタント
東京眼鏡専門学校非常勤講師
各種眼鏡技術セミナー講師

レンズの設計で遊んでみましょう

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会

専任講師 内田 豪

皆さん、生涯教育 2017「ハイカーブレンズへの対応」いかがだったでしょうか。少々内容が難しいと思われた方も少なからずいらっしゃったと思います。テキストに採用したレンズの特性や収差（非点収差）の計算は ZEISS 社から提供、使用許可を戴いたアプリケーション（以下アプリ）を用いました。

OSLO と呼ばれるアプリの操作画面（デモンストレーション画面）です。これはかなり専門的で操作にもそれ相応の勉強が必要と思われます（私も苦勞しています）。ご覧いただけるようにレンズの設計から収差（波面収差）PSF 等々の分析評価が出来るようになっています。

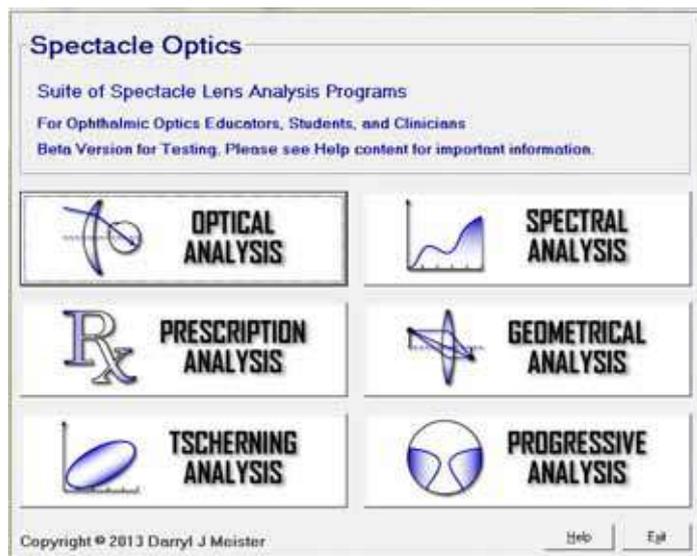


図-1 生涯教育で用いたアプリ

図-1 にアプリのオープニング画面を示しましたが、内容は実に豊富で学校（眼鏡学校です）の教育には打って付けではないかと思えます。私が許可を戴いたのは Beta 版なのですが、このアプリを製作された方は亡くなられたとのことで、その後のバージョンアップは困難になったのではないかと思います。ここ数年のパソコン（以下 PC）の性能向上には目覚ましいものがあり、光学を勉強する上で PC は大きな武器になると思います。最近はかなり専門的なアプリも登場しています。図-2 に示したのは

今年の生涯教育実技では OPD の使用と眼鏡度数の設定なども盛り込みましたが、OPD の理解には波面収差や MTF 特性などの知識が必須になります。ある意味で 21 世紀の眼鏡技術者は、店舗に設置する機器の測定データを理解する上でも勉強をする必要に迫られていますね。

さて、レンズの設計です。PC でレンズの設計が学べる時代ですから、レンズメーカー（眼鏡レンズメーカーです）側は更に高度な設計手段を講じて製造を行っている筈です。

図-3 は生涯教育でも解説を行いましたとおり、任意の度数で前傾角とソリを加えた時と眼鏡の装用度数がどのように変わるのか、これを調べてきた画面をそのまま表示しています。生涯教育での内容と設定は異なりますが、ここで注意したいのは球面が 1/100 単位、軸度も 1 度単位となっているところです。ここ数年、眼鏡レンズは装用状態を考慮したレンズ、いわゆるインディビジュアル（設計）系のレンズが市場を賑わしています。装用状態は枠のデザインやフィッティングの状態で個人差が出てきます。左右で装用距離や角度（前傾やソリ）が異なる事もあります。このような状態で眼鏡を作る際に度数を細かく微調整する事が、今のレンズメ

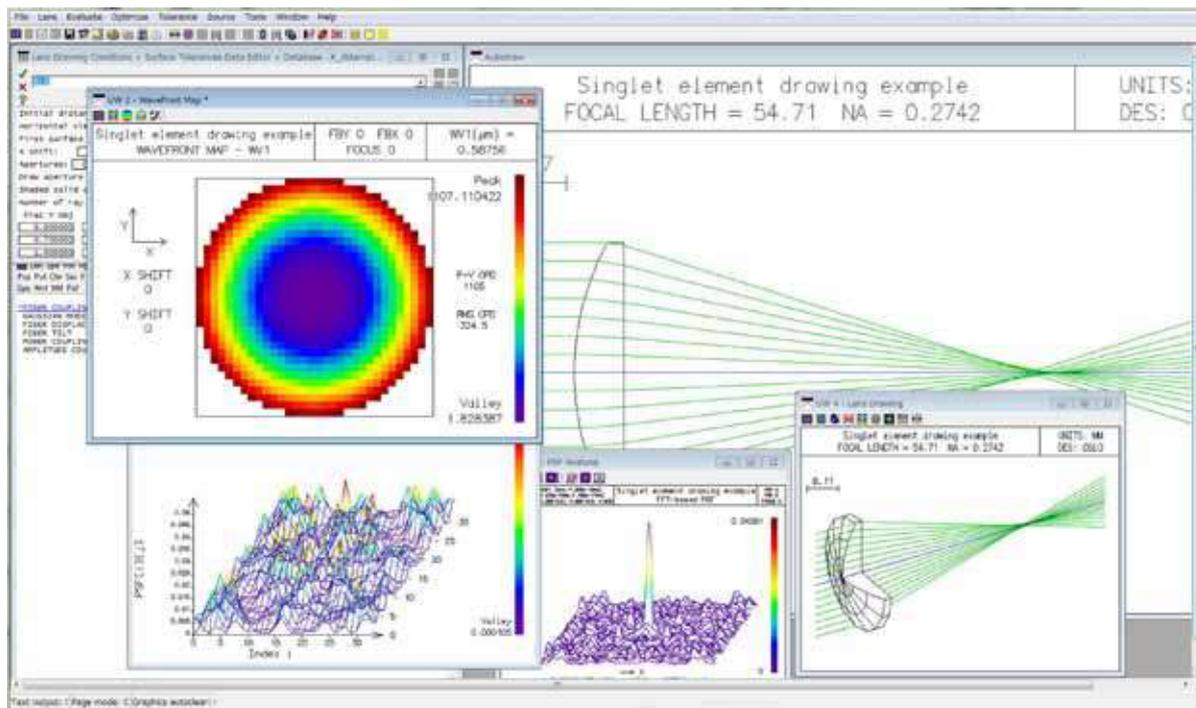


図-2 OSLOの操作画面例（デモンストレーション画面）

一カーで実現出来る状況になったことが最大のポイントです。レンズには収差がつきもので、その状態も様々な要素で変化する事、そして最新の眼鏡レンズは非常に細かい所まで考えて設計・製造出来る

時代になっている事を最終的に理解していただきたい、というところでしょうか。我々眼鏡技術者は眼鏡を設計しますが、このときフィッティングポイントをしっかり設定する事はあたりまえの事であり、

むしろこれからは眼鏡レンズの設計思想に合致、価格に併せた性能を発揮させる為に装用状態を的確に測定把握してレンズの製造に活かす努力が求められていると思います。

光学を学習するためのアプリは、フリーソフトもあるようです。「レンズ設計で遊ぼう」のタイトルどおり、インターネット時代、自宅のPC操作を行ってレンズ設計の奥深さを調べて体験してみることをお勧め致します。

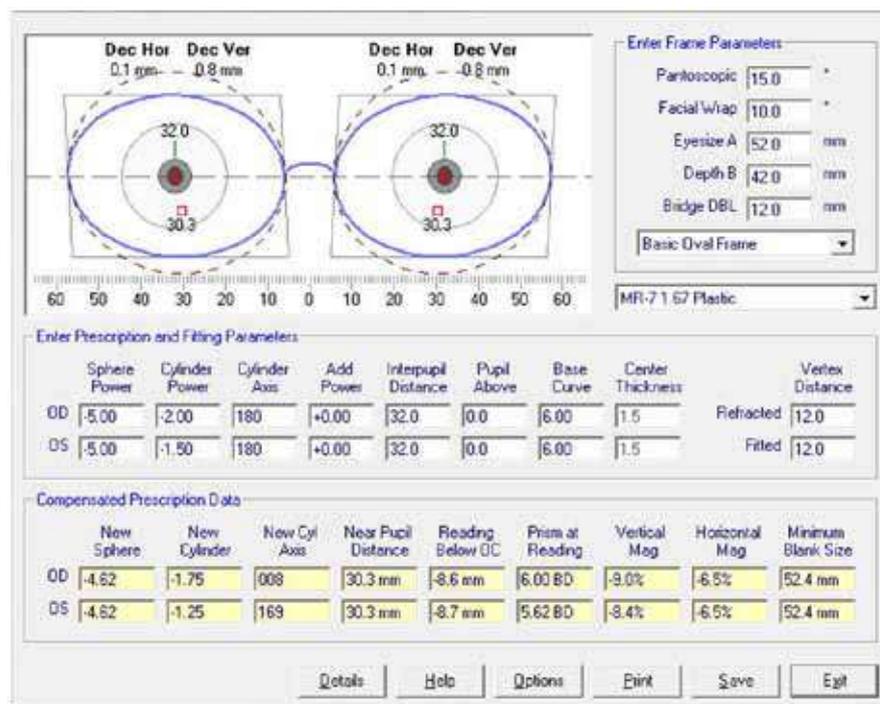


図-3 前傾&ソリと度数の変化

第2回 WCO 世界オプトメトリーコンGRESS &

第21回 APOC アジア・太平洋オプトメトリー大会報告(インド)

国際部 関 真司

1978年以來2年に1回開催される Asia Pacific Optometric Congress (APOC；アジア太平洋オプトメトリー大会)は、ラジブガンディ国際空港から車で45分位に位置し、インドの南部中央のハイデラバード(Hyderabad)のIT産業と金融地区の中心部に位置するノボテルホテルに隣接したハイデラバード国際会議場で開催されました。



写真1 9月11日 WCO & APOC 会議開催式

WCOの第2回世界オプトメトリーコンGRESS(World Congress of Optometry)と第21回 APOC 会議が、合同で9月11日から13日まで開催されました(写真1参照)。この会議場の入り口には空港に設置されている金属探知が置かれ、入場する人のボディチェックも行われる安全対策には驚きました(写真2参照)。今回の会議は、インド視覚



写真2 開催場入口での探知機



写真3 会議場内で金井氏と関

協会(India Vision Institute)が現地での主催者となり開催されました。今回30周年を迎えたWCO会議のテーマは、利便性、視覚の質と眼の健康(Accessible, quality vision and eye health)です(写真3参照)。

第20回 APOC 大会(マレーシア)のような APOC 単独の多数の演題・ポスター発表は今回はなく、APOCで毎回行われる K.B.WOO Lecture の Prof.Swan による「プライマリーケアと患者への潜在的影響」の講演でこの会議が始まり、WCOの教育プログラムを共有する形式でしたが、非常に充実した大会でした。この大会での教育プログラムでは、3日間で2つの討論会、98のセミナー、6つのWorkshop(実習タイプの授業)と187のポスター発表が行われました。3日間にわたり展示されたポスターでは、眼疾患に関する研究発表がほとんどを占めていたことは、特記することです。3日目には、WCO 全体代表者会議(GDM:General Delegate Meeting)が25カ国以上の参加で開催されました(写真4&5参照)。

新しく選ばれた新会長の Dr.Scott Mundle(カナダ)は、WCOの6地域の意見をまず集約してより効率的にWCOに反映されるシステムの構築をアメリカのAOA事務局内に移った新しいWCO事務局を通してすることを言明して、全体代表者会



写真4 WCOのGDM (全体代表者会議)



写真5 WCOのGDMで日本代表

議を終了しました。この大会を機に、インドのオプトメトリーの内容も大いに変わり向上していきと感じました。アジアで開催されたこの会を成功に導いた大きな要因の一つは、マレーシアでの第20回 APOC 会議に続いて日本の主な眼鏡関係会社から寛大なサポートによっていると思います (表1 参照)。この大会の詳細な報告は、<http://www.asiapacificoptometry.org/> APCO ホームページを参照してください。



表1

第2回 WCO 世界オプトメトリー・コンGRESと第21回 APOC 会議の前日に同じ会議場で、第21回 APCO (アジア太平洋オプトメトリー会議) での全体代表者会議 (GDM) が11カ国の参加で開催され、10項目ほどの議題が審議されました (写真6 参照)。

金井氏と関は日本眼鏡技術者協会の国際部から日本代表として会議に参加しました (写真7 参照)。

時間の制限がある今回の APCO 全体会議の運営をより円滑にするため、会議前にネット会議で理事間で事前討論があらかじめ行われたため、会議は円滑に進められました。特に、APCO 事務局が、香港の Hong Kong Poly 大学からオーストラリア協会の事務局に移ることが決まったことが、特記されます。

最後に、次期 (2018-2019 年) 役員改選が行われ、次の役員が選ばれました。

会長：Dr.Peter Hendicott (オーストラリア)、副会長：Ms.Kwai Mei Law (香港)、会計：Dr. Carmen Abesamis-Dichoso (フィリピン)、理事：Dr.Mitsuhsa Hayashi (日本)、理事：Mr.Shin Jang Cheol (韓国)、理事：Dr.John Ang (シンガポール)、理事：Ms.Guee-Dien Den (マレーシア)

次回の第22回 APOC は、2019年にフィリピンのマニラで開催します。開催曜日が決まり次第、発表されます。日本からのより多くの参加者を期待します。



写真6 APCO 全体会議で正・副会長



写真7 APCO 全体会議で正・副会長と日本代表

理事会 報告

日時／平成29年5月10日(水)
午後2～4時
会場／ニューオーサカホテル
出席／理事総数25名中、出席21名、
欠席4名。監事2名中、出席2名



理事会風景

総会議案を確認 会員減による財政逼迫



あいさつする津田会長

津田節哉会長があいさつで、「ネット上のビジネス・インサイダー・ジャパンというサイトで、崩壊寸前の米國小売業というタイトルで、ショッピングモールからブランドショップがどんどん撤退しており、空洞化が進んでいるという記事があった。理由はブランド品を購入する若い世代が現実の店舗で購入せずにネット上でしか買物をしなくなっており、場所をとる店舗での商売が成り立たなくなっている中で、Amazonが小売りの1位に浮上し百貨店のMacy'sが2位に甘んじている状況。

日本でも同じような状況になってきているが、あと50年で日本の人口が3分の2になっていくことや高齢者比率が高まることなどから、今後小売業が大きく変遷していくと考えられるが、我々の眼鏡業界が特殊な専門店であることを忘れず、そのためにも資格をきっちりと確立しなければならないと考えている。

今後とも推進機構並びに本協会の資格問題に関する活動にご支援・ご協力をお願いします。本日は総会前の決算理事会なので、最後まで慎重審議をお願いする」と述べた。



議長を務める木方副会長

【審議事項】

議題1. 第7回通常総会開催について

①鈴木利夫総務部長から、当日配布資料に基づき、第7回通常総会の日程、会場、議題、講演会の内容について説明した。懇親会については従来無料であったが、今回は会費を3,000円徴収すると述べた。



説明する鈴木総務部長

②平岩幸一財務部長から、当日配布資料に基づき説明。本協会の財政事情の逼迫により総会交通費の支給基準を資料記載の通り（航空運賃は正規の半額、手数料は支給しない、理事・支部長以外は交通費半額、宿泊はエリアを限り7,000円相当、他）とする。またこの案についてご賛同いただければ、今後の理事会等の交通費の支給基準にも適用したいと述べた。

③山崎親一総務副部長、木方伸一郎教育部長、亀井正美会員組織部長、野口毅社会福祉部長、辻戦三広報部長から、事前送付資料に基づいて平成28年度事業の報告を行った。また平岩幸一財務部長から平成28年度決算、岡野雄次監事から監査結果をそれぞれ報告した。

木方伸一郎議長は、意見、質疑を求めたが特に異議はなく、全員の拍手で承認した。

【報告事項】

(1) その他

①会員数並びに認定眼鏡士登録者数／会員数 5,681名、認定眼鏡士 6,877名（平成29年4月末現在）



説明する平岩財務部長



監査報告する岡野監事

②今後の会議日程／鈴木利夫総務部長が資料に基づき報告した。

③ブロック会議について／亀井正美会員組織部長から今年3月の予算理事会において、ブロック会議関連の予算を半額にすることが決定し、その際に開催頻度を半分に絞る案が出ていたが、費用を抑えた上で頻度を絞らない案もあり得るので、今後各ブロック長の意向を確認していくと提案した。

(意見) ブロック会議関連の予算を半額にするとのことだが、ブロック会議の内容や必要性についてもっと本質に迫った突っ込んだ議論をしていくべきではないか。

(回答) 会長として過去17年間ブロック会議に出席してきたが、認定眼鏡士制度を立ち上げた際に制度の説明をして各ブロックと直接議論し、皆様のご理解とご協力を得られたことは、制度を浸透させる上で非常に大きな意味があった。

今後眼鏡技能士の制度に移行した際に、量販店やチェーン店などが入ってきて、従来の本協会を中心とした組織から少し変わってくるのではないかと考えており、従来のブロック・支部という形では収まらず、違った形での地区の体制の集約が必要になってくると思われる。

現在の段階でのブロック会議の必要性については、日本眼科医会の賛同がいつ得られて技能検定制度が進展するかによる。進展すれば勿論皆さんに説明に行かねばならないが、現時点ではブロック会議に関連する予算は抑えておくこととするが、必要な時には開催せざるを得ないと考えている。

以上をご理解いただいた上で、ブロック会議は必ずしも毎年実施する必要はないと柔軟性を持ってお考えいただきたい。

(質問) 日本眼科医会からの賛同の見込みについてお聞かせ願いたい。

(回答) 日本眼科医会の理事会レベルではほぼ賛同を得られているが、地方の代議員の中には根強い反対意見も残っており、眼科医会としてその方々を説得するのに時間がかかっているのが実情。



報告する山崎総務副部長



報告する亀井会員組織部長



報告する野口社会福祉部長

④SSS級認定眼鏡士試験について／木方伸一郎教育部長から報告。SSS級は標準等級のSS級からさらに勉強したい人に刺激を与える目的で設定したが、受験者数は年々減少してきており、平成29年度は11人となった。受験料収入が8万円に対して試験実施費用が300万円と非常にアンバランスな状況となっている。従来はそれでも必要だということで続けてきたが、本協会の現在の財政状況ではこのアンバランスな状況を続ける訳にはいかなくなっている。

SS級の移行を中心とする国家資格化の流れの中でSSS級を今後どうしていくかが流動的であり、平成29年度のSSS級試験の実施は見送ることとし、次年度以降の方針は今年度内に決めることとした。ただあと1科目の合格を残す4名の方々については、日本オプトメトリック協会のオプトメトリストを目指していただくこととし、オプトメトリストの受験資格条件となっている4年制以上の眼鏡学校卒業の年限に足りない部分は通信講座で補っていただくことを前提に、従来のSSS級合格科目は移行していただけることとなった。



報告する辻広報部長

⑤国際事業について／金井昭雄国際部長から報告。2年に一度のWCOおよびAPCO大会がジョイントで9月にインドで開催される予定。従来はWCOの担当は東京眼鏡学校校長の林光久先生にお願いしていたが、本協会の財政も厳しい中でAPCO担当の関真司先生に代表して両大会に参加していただくこととしている。



報告する金井国際部長

第7回 通常総会 報告

日時／平成29年6月19日(月)
午後2～4時
会場／東京第一ホテル錦(愛知)
出席／社員数110名中出席60名、
委任状提出49名、欠席1名



通常総会の会場

経費削減の中で事業効率アップを図る 事業計画など原案で承認・まず日本眼科医会と折衝



あいさつする津田会長

津田節哉会長はあいさつで、当初は総会を6月14日に開催の予定であったが、急遽日程を変更して皆様にご不自由をおかけし申し訳なく思う。本日の総会は、いわゆる厳しい予算ということで、会員数がピークでは8千人近くいたが現在は6千人を下回り会費収入の減少が大きい。昨年度は従来通りのレベルの事業を継続するというので、積立金の1千万円を取り崩して収支のバランスを合わせたが、そういうことは長く続けられず、収入に見合った支出に抑えるべく、聖域なく大鉈を振るった予算とせざるを得なかった。特に総会の交通費を十分にお支払できなくなったことについて、残念で非常に申し訳なく思うが、この事情をご理解いただいて本日の予算案の審議をよろしく願いたい。技能検定制度に移すべく厚労省の職業能力開発局と折衝している中で、厚労省からの要求が日本眼科医会の正式な回答を得ることとされ、その後に話し合いに乗ると言われており、現在は眼科医会からの回答待ちの状態と述べたあと、事業報告、収支決算、事業計画、収支予算案など重要な案件について慎重審議を要請した。



司会を務める山崎代議員

【議事経過】

(1) 司会の山崎親一東京都支部代議員は、まずこの1年間に亡くなられた会員の方々のご冥福をお祈りするため黙祷を要請した。つぎに、本日の総会の定足数について、定款第18条の規程により社員総数の過半数(56名)以上の出席が必要であること、並びに本日の出席予定者数60名中現在60名の出席に加え委任状提出49名、合計109名となり、社員総数の過半数以上の出席となり本総会が適法に成立すると報告した。

(2) 津田節哉会長から開会あいさつ

(3) 司会の山崎親一代議員は、議長の選出について諮ったところ司会者一任の声があり、理事・法制部長の相澤博彦氏を指名し、賛成を求めたところ、全員の拍手をもって、本日の議長は相澤博彦氏を選出することに決定した。

(4) 相澤博彦議長は、議長就任のあいさつのあと、議事録署名人の選任について本職からの指名をもって決定したいと諮ったところ異議なしの声あり、大阪府支部平井了、京都府支部北村東司の両氏を指名、両氏は承諾した。

相澤博彦議長は、第1号議案及び第2号議案双方関連があるので、一括して議題にしたいと諮り、異議なしの声があり、直ちに一括審議に入った。

【審議事項】

第1号議案 平成28年度事業報告承認

鈴木利夫総務部長は、総会資料の議案1の平成28年度事業報告1から15までの会議の



説明する鈴木総務部長



説明する平岩財務部長

開催状況、各部の事業活動及び会員数等を詳細に読み上げて説明した。

第2号議案 平成28年度収支決算承認の件

平岩幸一財務部長は、総会資料の議案2の平成28年度収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表等について詳細に説明した。相澤博彦議長は、ここで監査報告を要請した。

監事を代表して岡野雄次氏から4月19日に行った監査の結果について、いずれも正確かつ適正に執行されていることを認めたと報告した。相澤博彦議長は、第1号議案、第2号議案について質疑を求めたが、特に質問意見がなく全員の拍手で承認された。

第3号議案 平成29年度事業計画承認の件

鈴木利夫総務部長は、総会資料の平成29年度事業計画について詳細に説明した。

第4号議案 平成29年度収支予算承認の件

平岩幸一財務部長は、総会資料の平成29年度収支予算について詳細に説明した。

相澤博彦議長は、第3号議案、第4号議案について質疑を求めたところ次の通り質疑が行われた。

(質問) 財政緊縮は理解できる。代議員として協力することは当然のことと考えているが、生涯教育の先生方の講師料、旅費について見直しを図るべきではないかと考える。

(回答) 生涯教育の支出は昨年度とほぼ同額の予算で計上。教育部全体としては種々の支出削減を計画しているが、生涯教育は事業の根幹と考えおり、講師の方々もお忙しい中をご協力いただいているので、今年は予定通りとさせていただきたい。講師旅費について源泉徴収が必要との指摘には対応していくが、講師料については当面今まで通り行いたいので、ご理解をいただきたい。

(質問) SSS級試験を今年には実施しないとのことだが、挑戦目標としては残しておくべきと考える。例えば3年に一度にするなどの方策もあろうかと考えるがいかか。時計修理技能士は3級、2級、1級とあり、1級の資格をとった者が職業訓練士の資格がとれる。学校の先生が持つべき資格として最上級の資格があってしかるべき。

(回答) SSS級はSS級の上であって、より高い仕事をしているという定義ではない。基本はSS級を皆に取得していただくことで、更なる向上を目指す人にとって何らかの刺激が必要ということで、海外の資格保持者やJOA オプトメトリストを取得された方々についてSSS級の資格を付与している。

JOA オプトメトリスト取得の道があるし、あと1科目の合格のみを残す人については今年には独自の試験を実施する。SS級も本協会の行っている試験はバイパスであって、基本は眼鏡専門学校を卒業して一定の成績をおさめた者がSS級資格を得ること。SSS級についても教育的な刺激ということで本協会が従来実施してきた試験での合格を目指すよりも、自分の能力を高めたい方は日本オプトメトリック協会の通信教育を受けながらその試験の合格を目指していただくという方向で考えている。

(質問) 眼鏡技能士という国家資格に移行していこうとしているが、折角認知に注力してきた「認定眼鏡士」の名前が変わってしまう事は、消費者にどのように新しい名称をアピールするか、お聞かせ願いたい。また技能士制度になった時に、従来のような生涯教育制度をどのようにしていくのかについてお聞かせ願いたい。

(回答) 眼科医会からの賛同書が得られて初めて厚生労働省職業能力開発局と試験をする団体、管理をする団体をどうするかなどの具体的な話し合いが始まる。制度が移行するときの消費者に対する啓蒙については、本協会だけではなく推進機構を構成する多くの眼鏡店や量販店の方々も入ってこられると思うので、それらを含めた新しい組織の中でPR費用をどう捻出していくかを考えるべきで、現在この場では明確にお答えできない。



監査報告する岡野監事



報告する木方教育部長



報告する辻広報部長



報告する福田広報副部長

（質問）和歌山県支部の会員から質問があり、当初は厚労省の技能士制度に乗ると国家資格化がスムーズに進むという説明を受けたと記憶しているが、現在は日本眼科医会の返事待ちでなかなか進まないのであれば、我々の認定眼鏡士のままでよいのではないかと意見に対して、どう答えたいでしょうか。

（回答）確かにそのような表現をしたかと思うが、新しく独立した眼鏡士という資格制度を作ることが、ここ数年の厚労省との折衝で不可能と判明してきた。政府が強く規制緩和を主張している時代の中では業務独占の資格は全く無理であり、既に存在する職業能力開発促進法のリストに1項目を追加するだけという意味で、法律としては作りやすいという表現をしたと思う。ただいつも壁となるのは日本眼科医会で、日本眼科医会との業務の棲み分けができなければ厚生労働省は絶対に動かない。

相澤博彦議長はほかに質問、意見がないことを確認し、第3号議案、第4号議案について承認を求めたが、特に質問意見がなく、全員の拍手で承認された。

【報告事項】

（1）教育部報告（木方伸一郎教育部長）消費者にとって信頼できる技術者であることが必要で、名称をアピールすることも勿論重要ではあるが、それ以前に眼鏡士自体が信頼に応えられる実力があるかどうか重要。そのために生涯教育を充実させて、できるだけわかりやすく、ためになるように教育を進めていきたい。その方向としては、単に一方的な手順を教えるのではなく、その人の眼の使い方をいかに的確に把握できるように聞き出していくかが重要。今回の90分の視機能検査のまとめは、デスクトップパソコンを例にとって、人がどうやって眼を使っているのかをうまく把握して視機能を活かすかをテーマとしている。

60分の眼科学では、消費者にとっては眼科と協力して信頼できる技術者になる必要がある。今年は点眼薬をテーマとしたが、眼科からこんな薬をもらったがどうかと言われた時に、病気のことはわかりませんと言うより、我々に適したテキストが必要ではないかと考えました。

30分のトピックスはハイカーブという格好はいいが光学的には難しい眼鏡をかけたい方がいるので、基礎知識を得ていこうとするもので生涯教育は最新の高度なテーマをということではなく、基礎の繰り返しではあるが分かりやすく講義をしていこうと講師が一生懸命にやっている。また生涯教育に出てこれられない方々も多いので、通信講座もDVDのプロジェクター資料がより見やすいように充実させてきており、繰り返し勉強ができるのでぜひ活用をお願いしたい。また支部のニーズに合わせるべく、実技のメニューも増やした。

（2）広報部報告（辻戦三広報部長、HP関連は福田吉美副部長）広報部は3つの事業を受け持っており、まず一つ目の会報誌の発行については4月の第152号は印刷をして発送したが、次の153号はHPへのアップだけにとどめ、印刷・発送は中止させていただく。ただし代議員、理事、役員、本協会関係者各位の150部くらいは印刷して発送したいと考えているので、ブロック会議などで周知徹底してください。

2つ目は認定眼鏡士の啓蒙・普及事業であるが、5月末に発行した教育特集号にリーフレット2種類及び視力表、推進機構ニュースNo.11を同封した。経費削減の中で事業効率が落ちないようにPR事業の改革を推進してきた。議論する中で、会員自らがリーフレットを手配りして普及啓蒙に当たるのが一番効率がよいとの話もあり、一人でも多くの消費者に顔が見える形での普及啓蒙をお願いしたい。本年9月には3回目となるミニカレンダーを作成してお届けする予定としている。リーフレットのイラストやモデル写真の転載については著作権の問題があるので、支部活動して実施するのはよいが、個々のお店の広告などで使うことは禁止されているので、ご理解をお願いしたい。

3つ目のHPの管理拡充については、HPのアクセス数は月間6千件内外で推移している。またトップページを改善してトピックスを掲載するようにしたので、活用をよろしく願う。

（質問）HPにレンズメーカーのリンクを張るとアクセス数が増えるのではないか。

（回答）個別企業のリンクを張ることは今のところは考えていない。

（質問）眼鏡技術者同士で質問すればすぐ回答が返るという仕組みをHP上で作れないか。

（回答）将来的には考えている。まずは会員に見ていただきたいというのが目標。

《感謝状贈呈》

南波邦敏前群馬県支部長は欠席



山下俊明前広島県支部長



佐藤正次前静岡県支部長

《講演会》

講演：「自己中心局在による空間認知の評価」
室伏ほのかさん（キクチ眼鏡専門学校卒業生）



講演会の司会を務める木方伸一郎教育部長



室伏さんに代わりキクチ眼鏡専門学校の吉原智講師が講演

《懇親会》



主催者代表のあいさつをする
金井昭雄副会長



乾杯の音頭をとる
西村輝和日本眼鏡販売店連合会会長



中締めの言葉を述べる岡本育三
眼鏡技術者国家資格推進機構代表幹事代行



司会を務める山崎親一青年部会長（左）と、
杉本佳菜子組織活性化特別委員会副委員長



懇親会場

理事会 報告

日時／平成29年10月25日(水)
午後2時～3時30分
会場／ニューオーサカホテル
出席／理事総数25名中、出席21名、
欠席4名。監事2名中、出席2名



理事会風景

平成29年度上半期事業報告

眼鏡技術者・認定資格制定委員長に魚里博先生就任



あいさつする津田会長

津田節哉会長は挨拶の中で、「5月に日本眼鏡学会の理事長が畑田先生から魚里博先生に交代したが、眼鏡技術者・認定資格制定委員会の委員長は従来から日本眼鏡学会の理事長にお願いしており、本日お越しいただいて委員長にご就任いただいた。今後発行する認定眼鏡士の認定証の名義人にもなっていただくので、皆さんにもお見知りおきをいただきたい」と魚里博委員長を紹介した。



あいさつする魚里認定資格制定委員会委員長

続いて、魚里博委員長が「現在は摂津市にある大阪人間科学大学の医療福祉学科の学科長で視能訓練士養成の主任教授を兼任している。4年半前に北里大学を定年退官し、新潟大学に1年間勤め、その後20年ぶりに関西に戻ってきた。育ちは神戸で、大学は大阪、家は京都で仕事は奈良医大に長く勤め、その後関東へ。

今は省庁関係の仕事も多く東京に自宅を置いて行ったり来たりしているが、今年5月31日に日本眼鏡学会で理事長に選出された。非力ながら大頭先生、畑田先生が築いてこられた学術としての日本眼鏡学会を発展させるとともに、眼鏡業界発展のために微力ながら努力していきたい。資格制度が成立するように頑張っていたきたいし、眼鏡業界だけではなく日本眼科医会や視能訓練士と連携して、日本国民の益するところが大きくなるように協力していくことが重要で、私はその仲介役を務めていきたいので、是非ともご支援ご協力を賜りたく、今後とも宜しくお願い致します」と挨拶した。



議長を務める金井副会長

【審議事項】

議題1. 平成29年度上期事業報告並びに上期決算報告の件

- ①鈴木利夫総務部長から、事前送付資料に基づき事業内容について詳細に報告した。
- ②木方伸一郎教育部長から、事前送付資料に基づき教育事業について詳細に報告した。
- ③平岩幸一財務部長から、事前送付資料に基づき上期決算について詳細に報告した。
- ④岡野雄次監事から、事前送付資料に基づき監査結果について報告した。

議長は、平成29年度上期事業報告並びに上期決算報告全般について、意見、質疑を求めたところ特に異議はなく、平成29年度上期事業報告、上期決算報告を、全員の拍手で承認した。



説明する鈴木総務部長

議題2. 平成29年度PR事業について

辻戦三広報部長から下記(1)(2)、福田吉美広報副部長から下記(3)報告した。

(1) 認定眼鏡士の普及啓蒙活動

今年度は予算に制限のある中で以下の活動に取り組んできた。

- ①9月15日に、津田節哉会長から提供いただいた写真をモチーフにした2018年のミニカ



説明する木方教育部長



説明する平岩財務部長

レンダーに推進機構のリーフレット2種類を同封して発送した。

②6月1日に視力めやす表と推進機構ニュースNo.11を教育特集号に同封して発送した。

③認定眼鏡士の新規登録及び更新者の登録証の発送に際して、ステッカーとリーフレットを同封。

(2) JOA 会報誌発行

11月初めの会報誌153号からHPへのアップのみとし、印刷して全会員に発送するのは中止する。役員、支部長には印刷して送付する。

(3) HP の管理・拡充当日配布資料に基づき報告。

HPのトップページにトピックス欄を新設し、随時アップしている。また10月の各支部活動についてもアップする。

議長は、平成29年度PR事業全般について意見、質疑を求めたところ、特に異議はなく、全員の拍手で承認した。



報告する岡野監事



説明する辻広報部長

議題3. 諸規定の制定について

鈴木利夫総務部長から事前送付資料に基づき、出張旅費規程及び講師旅費規程の制定について提案があり、特に異議はなく全員の拍手で承認した。

【報告事項】

1. 眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の動き

推進機構代表幹事代行の岡本育三理事から、当日配布資料に基づき、①関連団体関連、②パンフレットの増刷・配布、③技能検定制度に関する説明、などについて報告した。



説明する福田広報副部長

2. 日本眼鏡士連盟の活動と収支状況について

日本眼鏡士連盟の神田幹雄事務局長から、当日配布資料に基づき会費の請求状況や政治資金パーティを含む活動などについて報告した。



報告する岡本理事

3. 組織活性化特別委員会

組織活性化特別委員会委員長の横山武志理事から「本日第19回の特別委員会を開催。主な議題は平成29年度の青年部会／女性部会主催セミナーの確認、平成30年度の活動方針として過去数回のセミナー開催にこだわらない、活性化委員会設立の原点に立ち返った、若い人や女性が参加しやすく意見が反映され、本協会の活性化に繋がるような活動を模索していきたい」と報告があった。



報告する日本眼鏡士連盟
神田事務局長

4. その他

①会員数並びに認定眼鏡士登録者数／会員数5,700名、認定眼鏡士6,675名（平成29年9月末現在）

②今後の会議日程／鈴木利夫総務部長から、①②について、当日配布資料に基づき、各々報告した。

③災害見舞い報告／日本眼鏡関連団体協議会の大規模災害システム構築委員会委員である福田吉美吉美氏から、7月の九州北部豪雨についての本協会の対応について報告があった。



報告する横山理事

「目の愛護デー・メガネの日」関連などの支部活動

10月末までにいただいたご報告です



福岡県支部(仲西隆義支部長)は、9月27日、福岡三越前ライオン広場で「10月1日はメガネの日」と題して支部初のイベントを開催、約800名が訪れその内メガネ着用者450名が来場、同支部の認定眼鏡士在籍店のチラシとメガネの日のロゴ入りメガネ拭きのセットを

配布したほか、レンズメーカー4社が、体験会(ニコン:VR体験、東海光学:ルティン測定体験、セイコー:紫外線対策、HOYA:目と健康カラー相談)などを行いました。体験された方の特典として、ブランドメガネケースを進呈。また、キューティーパイまゆちゃんのMCで効果的なPRを行いました。(写真右上)

会場には、KBC九州朝日放送、TVQテレビ九州2社が取材に訪れ、当日のニュースで放映されたほか、翌日には毎日新聞、西日本新聞に掲載されました。イベントは、事前にチラシを配布、当日は支部の25名が参加しました。「初のイベントもトラブルなく大成功に終わりました」とご報告をいただきました。



東京都支部(山崎親一支部長)は、9月30日の「第5回めがね供養会」(写真上)と、10月1日のプロバスケットチーム「アースフレンズ東京Z」の試合に東京眼鏡販売店協同組合とともに協賛しました。

メガネ供養会は、東京都台東区上野不忍池畔の弁天堂で開催、約2,000本のメガネを供養しました。年を重ねるごとに一般ユーザーの当日持ち込みが増えており、今年は16名から89本の供養メガネが持ち込まれました。

「アースフレンズ東京Z」の試合では、約25本の組合の幟を設置したほか、視力表とリーフレット2種(メガネのお手入れ、私のメガネは「認定眼鏡士」に作ってもらいました)と眼鏡技術者国家資格推進機構のリーフレット2種(ぼくの、わたしの、メガネ、まず眼科検診でおよび加齢による目の病気)を1セットにした配付ツール300セットを来場者一人ひとりに手渡し、メガネの日をはじめ組合加盟店および認定眼鏡士のPR活動に取り組んだとのこと。



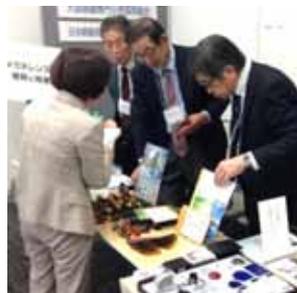
熊本県支部(古賀寛治支部長)は、10月1日、手取神社で「メガネ供養祭」を執り行いました。例年、熊本県眼鏡商組合との共催でしたが、今回から単独での開催となります。

古賀支部長は「眼鏡士の社会的使命とお客様に提供する視力の意義を新たにしました。今後の課題として眼鏡士の新聞広告や目の愛護デーにちなんだ社会的イベントに参加できたらと考えています」とご報告いただきました。



神奈川県支部（小野明夫支部長）は、認定眼鏡士制度の啓蒙と「10月1日はメガネの日」のPRを9月28日、横浜駅東口・SOGO前で実施、約2,000名が訪れました。

「今年は、ビジョントレーニングや色合わせなど目に関するゲームを行い、非常に盛り上がった」とのこと。「しかし、まだ認定眼鏡士の存在や正しいメガネの取り扱いなど、もっともっと努力し、啓蒙しなくてはいけないと痛切に感じました。今後も可能な限り続けていきます」とご報告をいただきました。



大阪府支部（平井了支部長）および大阪眼鏡専門小売協同組合は、大阪府眼科医会開催の10月8・9日にブリーゼプラザ小ホールにて「目のすべて展」に協賛しました。2日間合わせて、来場者数は527名、絵画コンクール投票数は152名。

メガネに関する講演会では、日本眼鏡技術専門学校の辻一央校長が「眼鏡調整の大切さ」をテーマで講演しました。遮光眼鏡・累進レンズ・拡大鏡の展示は、昨年までは講演会場の小ホールで展示でしたが、今年は目の健康相談と同じフロアで相談も併せて行いました。また、絵画コンクールは「メガネで見つけた大切なもの」をテーマで、出品作品を小ホールに展示、来場者に投票してもらいましたと報告をいただきました。

メガネに関する講演会では、日本



宮崎県支部（山口清一支部長）は、NPO法人スローライフ宮崎主催の「めがね供養祭」に参加しました。

実施は、10月10日午前10時10分で、宮崎県支部、卸店の協力で400～450個、ほかに一般参拝者やNPO法人からのものを合わせ約1,500個集まったそうです。



高知県支部（楠瀬剛志支部長）は、10月8日、高知市の中央公園北口前で、高知眼鏡商組合主催の「メガネのチェック＆チェック」に協力しました。なお、同所で高知県眼科医会による「目の健康相談」も同時開催されました。

当日は、同組合員であり認定眼鏡士10名が、「メガネクリニック」として、メガネの点検・クリーニング・相談などのほか、チラシやセリートなどで「メガネの日」や「目の愛護デー」のPRを行ったとのことでした。



福井県支部(赤松賢治支部長)は、10月21日(公財)福井県アイバンクの主催する「目の愛護デー事業」に協賛。400枚のチラシ、リーフレット、ティッシュを配布したほか、メガネの洗浄、調整などを行いました。

京都府支部(鈴木利夫支部長)は、10月9日、ゼスト御池の河原町広場で、京都府眼科医会の主催する「忘れていませんか目の健康」に協力。5名の認定眼鏡士が相談に応じました。大半の方が「メガネが合っているかどうか」の内容で訪れたということです。



徳島県支部(相原雄二支部長)は、10月1日、葛城神社で「メガネ供養」を開催しました。集まったメガネの一部と卸業者さん提供のフレームとレンズを加工して、県眼科医師会の災害対策に寄贈するとのことでした。



北海道支部(中山勝弘支部長)は、10月23日、定山溪ホテルで、札幌市稲区老人クラブ連合会のリーダー研修会で講演しました。講師は同支部の中川明雄氏、講演内容は「メガネの機能を100%引き出すためには！」で、女性12名、男性30名の計42名が聴講し、

「メガネの奥深さを知ることができたと好評でした」とのご報告をいただきました。



近畿眼鏡協議会(近畿地区の眼専組合などで組織)は、10月1日午前10時50分から第60回眼鏡感謝祭を神戸市長田区の長田神社で挙行。兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山の関係団体の代表、日眼連・メーカー、卸も含め約30人が参集、生業に感謝するとともに眼鏡業界の景況回復を祈願しました。また、一般の方には供養するメガネを入れる「受け入れ箱」を設置しました。

神前祭典、祝詞奏上、神楽の舞に続き、それぞれ玉串を奉奠したあと降殿し、祈願木を燃やす炊き上げを境内で執り行ないました。この後、境内にある眼鏡碑前に移り、参加者全員で記念植樹をし、感謝祭を終えました。



大阪眼鏡商工連合会(大阪眼鏡専門小売協同組合・大阪眼鏡卸協同組合・近畿眼鏡類協同組合・本協会大阪府支部の団体で構成)は、10月10日に住吉大社で眼鏡祈念祭を挙行了しました。

祝詞奏上、神楽奉納に続き、祭主の中尾卓司大阪眼鏡商工連会長、開高みどり眼鏡碑保存委員会会長、川本豊次近畿眼鏡類協同組合理事長、西村文子眼鏡卸組合組合員、福田大阪眼鏡小売協同組合副理事長、辻一央本協会大阪府支部会員がそれぞれ玉串を奉奠しました。このあと、境内にある眼鏡碑前に移り、古メガネのお祓いを執り行ない祈念祭を終えました。



岩手県支部（村上吉則支部長）は、10月1日付の岩手日報に広告(カラー)を出しました。



埼玉県支部（栗原宏治支部長）は、4月7日付の読売新聞に広告を出しました。



奈良県支部（森本勝支部長）は、10月1日付の奈良新聞に広告を掲載、今後同内容で再度掲載予定とのことです。



佐賀県支部（清水信弘支部長）は、10月9日付の佐賀新聞に広告を出しました。



兵庫県支部（北出彌一郎支部長）は、10月1日付の神戸新聞に広告を出しました。



鳥取県支部（持田典子支部長）ならびに島根県支部（横山武志支部長）は、認定眼鏡士啓蒙の三角ボールペンを作製。三角の面には、「大切なメガネは『認定眼鏡士®』にお任せ下さい。」とのコピーや3m視力表のデザインが入っています。両支部の認定眼鏡士に各100本配布したとのことです。

長野県支部（林四郎支部長）は、12月から2月に新聞広告を出す予定です。



和歌山県支部（山田稔支部長）は、新聞では10月10日に読売新聞に出しました。ラジオでは、和歌山放送でスポット広告を10月7日から10日までに9本、10月9日の「つながるワイド」内でパブリシティでのPRを実施しました。さらに、同ラジオ番組の「ボックス」(10月10日、中山智美パーソナリティ)に出演し、本協会および認定眼鏡士、メガネの説明をしたあと、パーソナリティのメガネの話、最後にステッカーで認定眼鏡士のいる店を確認して、相談してほしいと締めくくりました。



鹿児島県支部（岡野和典支部長）は、標語啓発ポスター(A3)を作製、鹿児島県支部会員に配布し、各店頭に掲示して消費者にPRしました。

消費者の眼鏡相談

消費者からのご相談・お問い合わせは、各地域の消費生活センターを通じて、本協会消費者委員会（亀井正美委員長）から同センターに回答しています。

●水戸市消費生活センター（平成28年7月12日）

相談内容

ツープイント枠に遠近両用レンズのメガネを12万円で求めた消費者からの質問です。

レンズの穴の位置が左右対称ではなく上下にずれているように感じましたが、顔にフィットするよう調整してもらいました。レンズの穴の位置が上下にずれていることを指摘しましたところ、顔がゆがんでいると言われました。

相談者は、穴を開ける位置を間違えたのではないかと考えています。

回答

相談者の顔・状態とメガネの型などを見ていないので的確な回答はできませんが、眼鏡調整の必要な三要素に「光学的、力学的、美的」があります。

①光学的な要件を満たすために、仕方なく位置を変える場合がありますが、あらかじめ消費者に了解を得る必要があります。

②力学的な要件を満たすには、きちっと収まるまで販売店（眼鏡販売技術者）は調整しなくてはなりません。

③消費者が見て、はっきり穴の位置のずれがわかるようなら、技術的に失敗です。

※あくまで、穴位置のずれが、問題であれば造り替えを求めるしかありません。

●独立行政法人 国民生活センター（平成28年11月4日）

相談内容

メガネの訪問販売による契約で、ご本人は87歳の要介護2で自宅に一人である時に訪問があり、45,360円の眼鏡を契約（10月19日）した。（老眼かどうかは不明。ただ、普段眼鏡は使用せずに生活しており、このメガネを掛けても掛けていないのと同じ状態です）

訪問業者は自宅に視力を測る機械を持ち込んで（目にかぶせるような物）測定し、メガネを作ってきています。本人はそこまでやってもらったので、契約しないと悪いと思って契約したようです。

Q1. 自宅に持ち込めるような機械で目の検査は可能なのでしょうか。その検査を行うための何か必要な資格はないのでしょうか。

Q2. この方が契約した書類の中に御注文品内訳とあり、そこに

測定結果→遠用 に「6310 カラー BL サイズ 52

メガネレンズ 品番 EA75UVS-H カラーなし

使用目的 遠・近・累進・二重・その他 → ここには「遠」に丸がある

フレーム区分 在庫枠・先枠・後枠・発注枠・委託枠 → 「委託枠」に丸がある

と書かれています。上記の情報で商品を特定することは可能ですか。

Q3. 通常の視力矯正用のメガネや老眼鏡は訪問販売による検査でも作ることは可能ですか。

回答

Q1 はハンディーオートレフラクトメーターだと思います。これでおおよその遠用度数は測ることができます。その後のどのような検査をしたかわかりませんが、仮枠などで視力の向上が見られるか違和感がないかの検査をしたかは疑問です。

Q3 にも関連しますが、その検査をする資格は現在の日本にはありません。業界認定資格の本協会の認定眼鏡士資格がなくても、店売り、訪問販売でメガネを作るための検査はどなたでもできます。

Q2 は「63」の数字はその方のPD（瞳孔間距離）です。メガネフレームはこの番号だけではメーカーの特定は難しいです。レンズは外径75mmのUVカットの商品かと推測できる程度でメーカーなどは特定できません。使用目的の「遠」に丸がある事は遠近両用ではなく老眼用でもなく、遠くを見るための単焦点レンズだと思います。

「委託枠」はメーカー委託で在庫せずに売れた物の代金をメーカーに支払う方式だと思います。契約書に現在のメガネと測定度数が書かれていない事とレンズ・フレームの原産国表示がない事は少し疑問です。また、契約とともに渡しているはずのレンズとフレームの取扱説明書でメーカー名が特定できるはずですが、

眼鏡技術者・認定資格制定委員会

10月25日午後1時30分からニューオーサカホテルで、第19回眼鏡技術者・認定資格制定委員会が開かれた。出席は、有識者委員3名、本協会委員4名の計7名。

委員長改選について津田会長は、「平成12年に認定眼鏡士制度を立ち上げた時に、それ以前までの諮問委員会を発展させて作った。委員長には日本眼鏡学会の理事長、有識者委員には各眼鏡学校の代表者、本協会からの委員で構成している。今回は日本眼鏡学会の理事長が交代したので、本日の委員会で魚里先生に委員長に就任いただきたいと考えるが、ご賛同いただけるか」と提案し、全員の拍手で承認された。



(写真は魚里委員長)

組織活性化特別委員会

組織活性化特別委員会は、10月25日午前11時30分からニューオーサカホテル13階「翡翠の間」で、委員会を開催、4名が出席した。

議事は、まず①29年度青年部会・女性部会特別セミナーについて、『顔ヨガ・姿勢&ウォーク 体の緊張を緩める運動』、講師/野崎ふみこ先生(ヨガ指導者・心理カウンセラー・漫画家)、開催日時/大阪:平成30年2月14

日13:00~16:10 南船場会館、東京:22日13:30~16:40 油脂工業会館9F会議室、愛知:27日13:30~16:40 ウィンクあいち907号室、受講料は会員4,000円、非会員12,000円、定員30名

このほか、②30年度の活動について協議した。



(写真は組織活性化特別委員会)

2018年ミニカレンダーをお届けしました

今年も9月初めにミニカレンダーを10部ずつお届けいたしました。

今回は、津田節哉会長が第10回秋艸道人賞写真コンテストで早稲田大学津八郎記念博物館賞を受賞した「洞窟の祈り」をはじめ、ベトナムの風景や子供達、また(一社)福井県眼鏡協会・公認めがね大使 Cutie Pai まゆちゃんの写真を掲載しています。

また、眼鏡技術者国家資格推進機構発行のリーフレット2種も同封いたしました。

各店でお客様にお渡ししていただくなどご活用ください。



編集後記

* 厳しい現状に打ち勝つには、お客様に最も信頼されるメガネをすることではないでしょうか。

初心に立ち返ることも必要です。

現実を客観的に見直すことも必要です。

消費者に信頼される眼鏡技術者になるために、生涯教育は眼鏡技術者の根幹です。

* 幸福な人生は、ご自身の成り立ちを自覚して、人生の改善の努力を重ねることによって実現するものです。

すなわち心ずいと行いの改善こそ、人の幸福の元です。

同情や親切は社会生活にとって大切なものです。災害にあった人々を見舞う時、見栄や外聞にとらわれず、心から同情と親切を尽くさなければなりません。

* 木枯らしの吹く晩秋の夕暮れ時、なぜか感傷的になり人恋しくなるものです。早足に家路につくと我が家の灯りにほっとして家族の笑顔に幸福を感じます。

朝晩の冷え込みとともに、山里や市街の木々は赤黄色のグラデーションが深まっていきます。

(戦)

訃報 染川正人氏(元副会長)は8月1日逝去。83歳。染川氏は、平成4年度から理事、同10年度から17年度まで副会長兼総務部長として当協会の運営にご尽力いただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。